



Title	モンゴルから日本、日本からモンゴル：小貫雅男先生にお会いして
Author(s)	T., エネビシ
Citation	モンゴル研究. 2018, 29-30, p. 103-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

■ 創刊 30 号記念特集 ■

《インタビュー》

モンゴルから日本、日本からモンゴル

～ 小貫雅男先生にお会いして ～

T. エネビシ

《インタビュー掲載の経緯について》

このインタビューの『モンゴル研究』創刊30周年記念号特集に掲載にあたり編集部は下記の手紙を小貫雅男先生に送り承諾を得た。エネビシ氏へも同様の説明を行い了解をえた。経緯の説明の為にその一部を下に付記する。

(編集部)

小貫雅男先生への手紙一部抜粋

.....

以前、お話ししましたが、モンゴル研究創刊30号記念号に、エネビシさんが先生にお会いしたときの会話を(もちろん先生の許可をいただきましたが)、インタビューとして掲載したいと考えています。

エネビシさんはインタビューしようとしてお話をうかがったのではなく、先生にもそのようにはお話していないと言っていました。彼女がテーブルを起こした文章を見せてもらったところ、とてもいいインタビューになっていました。

研究者の使命や、研究のあり方が明快に述べられ、特に、若い研究者、研究者の卵に対する何よりのアドバイスになっています。

また、「菜園家族」についても、著作とは違った、会話ならではの柔らかい口調で語られていて、その骨子、勘所がわかりやすく、先生の菜園家族についての著作を読む者にとっても大きな助けになりそうです。

さらに、モンゴル、日本でのフィールドワークで得たものが普遍的な課題の発見とその解決策の模索と提示、未来社会論の構築、そして原理の明確化(哲学)と実践へと総合されていく過程がよくわかります。

この対話をこのままにしておくのはもったいない。ぜひ、インタビューとして掲載させていただきたいと思います。

会話そのものは、もっと長く、興味深いところはもっとあったのですが、このインタビュー原稿では、エネビシさんへの特に個人的なアドバイスと思われる部分を省き、研究者を目指している学生一般へのアドバイスとなる部分、先生の著作への理解の助けとなるであろう部分をとくに選んで編集しています。

ご一読いただいて、掲載の許可をいただけないでしょうか。また、手を入れていただけるならそれも大歓迎です。

ぜひご検討の程、よろしくお願いいたします。

吉本周平

私は2013年に研究生として日本に留学した。日本に来る前に、地方移住者によって拡大するウランバートルのゲル地区で NGO と住民の連携による地域づくり活動に携わっていた。そこでの経験や、見て感じてきたことをこれから日本の大学院に進学し、どのように研究テーマに展開させていくか、と考えていた。モンゴル語でも、日本語でも文献を読みながら考えていた時に、小貫雅男先生の『遊牧社会の現代』をはじめいくつかの本に触れ、制作されたドキュメンタリー映像作品『四季・遊牧—ツェルゲルの人々—』¹⁾を見た。

小貫先生の著作から、社会主義時代の遊牧地域におけるネグデルをベースにした地域づくりの様子、社会主義体制から市場経済化を経て資本主義へと転換する変わり目の時期における遊牧地域の地域づくりの様子が伝わってくる。特に、社会主義体制の体験が薄い私たち若者にとって、当時の地域社会をフィールドワークし、分析してまとめた日本のモンゴル研究者の視点は興味深かった。

せっかく日本に留学しているので、ぜひ直接小貫先生にお会いして、モンゴル研究者としての長い年月の経験、知見をお聞きし、お話を伺いたいと思った。メールを送ったところ、小貫先生ご自身から電話をいただき、歓迎して下さった。2016年8月、滋賀県犬上郡多賀町大字大君ヶ畑の里山研究庵 Nomad に居を構える小貫雅男先生を訪ねてお話を聞いた。

●モンゴルから日本、日本からモンゴル

小貫先生 せっかく日本に来ているのだから、日本の現実から学ぶことによって、モンゴルの未来は日本と同じような方向ではなく、もっと独自の、モンゴル独自の方法があるのではないかな。それを大きなテーマにしながらドクター論文までまとめるといいですね。

【小貫先生著『遊牧社会の現代』²⁾ から】

エネビシ ネグデルの協議会で、ネグデルには何が必要なのかとかネグデル員が協議して、共同ファンドをつくって、その中から生産の基盤とか、福祉や教育などに配分されていたのですね。

小貫先生 牧畜からあがった収益をどのように仕分けしてファンドに入れるのかといった、そんな再生産構造の図式も描いてあった。例えば家畜小屋を立てることや教育・福祉にどう配分するとか。ファンド全体が大きくいくつかに分けられて、生産と再生産が満遍なくゆきわたり循環するようにできていたわけです。これはみなネグデルの定款に書かれてあった。その点は優れている面でもあるのですが、一番問題なのは、「指導性」という言葉が強調されているわけです。人民革命党が上から目線で指導するということになっているのです。憲法にもそう書いてあったし、その当時はね。そうすると、一人ひとりの遊牧民よりも、上に立つ指導者があらゆるものを掌握して指導できるようになってしまう。下にいる遊牧民たちは、言われたことだけをやることになるから、自分から進んで何かを工夫する能力がだんだん失われていくわけです。そこに、ネグデルで1960年代、70年代、80年代とやって、1980年代の末期になってから家畜頭数が伸びなくなってしまった本当の原因があるのです。社会主義の理念そのものは優れているのですが、ネグデルを現代のモンゴルにただちに適用することはできない。今日の社会全体をどうしていくのか、それに代わる新たな理念と新たなシステムが必要。それは上に立つ人間に任せてしまうのではなく、下からどうやって実現していくのかということが、モンゴルに限らず日本においても21世紀の今、探究すべき大きな研究テーマなのです。今日はそのことについて、これらの本を参考に考えていきましょう。

エネビシ 私も日本留学前、ウランバートル郊外の地域でやっていて一番疑問に思ったことがそこ

1) 映像作品『四季・遊牧—ツェルゲルの人々—』三部作・全6巻、7時間40分(小貫雅男・伊藤恵子 共同制作、大日、1998年)

2) 『遊牧社会の現代—モンゴル ブルドの四季から—』(小貫雅男、青木書店、四六判・289頁、1985年)

だったのです。人々が指導されない限りはやらない、自発的に積極的にやって行かない。どうしたらこれを変えられるのか？ということでした。

小貫先生 人が自発的にやらないということはモンゴルだけではない。最近の日本も同じです。日本は戦争に負けた直後、貧しかった頃、特に農村ではみな積極的に自らの頭で考えて、生産に励んだ時期があったのですよ。特に1945年から1950年代半ばぐらいまでは。ところが1950年になって朝鮮戦争が勃発して、日本の資本主義が復活するわけです。そうすると上から目線の指導みたいなのが次第に強化されるようになる。すると、「選挙」で代表を選ばあとは誰かがやってくれる、お上が。上に立つ偉い人がやってくれると思うから、受け身になっていくのです。だんだんにね。それが今日まで70年ほども続くのです。だから、みんな前向きにやるという精神が次第に薄れていく。一部にはいい傾向も現れてきたけれど、全体としては遅れてしまった。

●「地域」について

小貫先生 自然と人間が有機的につながるひとつのまとまりある地理的空間、括弧付きの「地域」を、モンゴル語で言うと、ノタッグ・オロン нутаг орон と言います。ツエルゲル村 Цэлгэр (バヤンホンゴル県ボグド郡)を例に挙げると、広大な砂漠に聳える標高3,590メートルの東ボグド山の自然の広がりの中で、60家族ほどの遊牧民たちが、ヤギやヒツジや馬や牛(ヤク)やラクダの家畜を放牧し、協力し合いながら暮らしている。このように、それは、自然と人間が融合して有機的に結びついて動いている、動体的なひとつのまとまりある地理的空間としての、基本的で基礎的な単位なのです。それを私たちはノタッグ・オロン、日本語で「地域」と呼んでいるのです。「地域」とは、東アジア地域などという時の地域ではなくて、それはモンゴルの遊牧地域を長年にわたって観察し、そこから生まれたひとつの新しい概念なのです。つまりそれは、人体の基本的で基礎的な単位である細胞を見ると全体が分かるように、日本の現実をトータルに見る場合にも役に立ちます。

今書いている本は全部、こうした考えが根底にあるんですよ。だから、一番大切なことは「原理は何なのか」ということ。そして、「未来に向かって何をどう解決していくのか」ということでもあるのです。その両者をきちんと結び付けなければいけない。このことをしっかり考えておくことです。絶えず考えながらやるということですね。そのうちにだんだん知識や自分自身の考えが次々と生まれ、蓄積されていくのです。そのうちにいい論文にまとまっていくでしょう。それは論文のためにだけでないのです。何よりも自分にとって生きる心の糧になるはずです。

エネビシ モンゴルでは形式的には意見をいう自由が与えられているように見えるが、実際にはそうではない。

小貫先生 モンゴルの人たちは、本来、人間というものは、今言った「地域」ノタッグ・オロン нутаг орон に密着して、そこで日常的に生産に携わって生きるものだということ、そして、どうしたら「地域」での暮らしがよくなるのか、そういう視点から深く考えることがまだないのではないのでしょうか。それは、日本人も同じですよ。それを自覚すれば必ず鍛錬される。鍛錬されれば人間はどんどん強くなる。そのチャンスが、つまりそのような生活の“場”が失われてしまったのです。

日本の場合だったら、多くの若者が東京や大阪など大都会へ行ってしまう。それを私は「根なし草」となると言っているのです。根っこのない草。自分で自分の食べるものを大地から吸い取ることができない人間。つまり、18世紀産業革命以後に現れてきた近代賃金労働者。賃金労働者になって都会に浮遊して行って、どこかの会社に雇われ、賃金をもらって、それで生活のすべてを賄うわけです。食

べるもの、着るもの、住宅から、社会保険、医療・介護・教育に至るまで、全部お金で解決する。これは自分の根で大地から吸い上げたものじゃないのです。もらった賃金ですべてを賄うということ。これは悠久の人類史の中でも稀に見るめずらしい時代なんですよ。イギリス産業革命以降のわずか300年間の時間。地球の長い歴史から見ると、200年や300年はわずか一瞬にしか過ぎない。人類史のほとんどがそうではなかった。ところが近代になって、人間は大地から切り離されたそんな存在になってしまった。

だから民主主義は、観念の中での、実体の伴わない形だけのものになってしまった。それは、今日言うところの「お任せ民主主義」。誰かに任せた民主主義。代議士を選べば、その人がはるか彼方の議会で決めてくれる。あの人たちは偉い人間だし、自分が何かしなくても、いつか誰かがやってくれる。日本はそんな状況に陥ってしまった。モンゴルもたぶん同じではないでしょうか。

エネビシ 私の関わっていたウランバートル郊外の地域では、そこを下から変えていく取組み、挑戦があって、生産手段は持っていないけど取りあえず、自分たちにどんな問題があって、自分たちに何ができるか話して、それを実現して行こうと。その際それをひとりひとりではなく、住民が組織されることによってやるということをやりはじめていたのですが。

●研究者と現実社会

小貫先生 研究者にとって大切なのは、調査の方法です。社会の現実から知識を得なければ研究はできないでしょう。だから、研究者はあくまでも生活の現実に向き合い、そこに深く入って、人々に接して、生活の実態に溶け込んでいくことなのです。そこから真実は何かということをつかむ作業なのです。時には住民と一緒に動くこと。そして、お互いに信頼を勝ちとっていく。でも本当にやるのは、あくまでも、そこに生活している人たちがやるわけです。研究者は現場に入り、そこで得た事実を整理し体系立てて、歴史の中に位置づけ、それがどういう意味を持っているのかを考え、その上で、将来はこういう方向に「地域」は、社会は、むかっていくのではないか、ということをおくまでもひとつの考えとして提示するのです。それが研究者の任務、使命なのです。今の研究者はこうした地道なことを避けて頭の中だけでやるから、現実からかけ離れてしまう。知らず知らずのうちに、「学会」という閉じた狭い世界の中で「お偉い先生」になることが目的になってしまう。だからいつまで経っても、現実を変える方向には向かっていかない。若い人たちは、こんな研究者になったらだめ。だから、人々の暮らしの現実の中に深く入っていくことがとても大切になってくるのです。現場に入っていくのは大事ですが、あくまでも生きた真実をつかみ出して、その事実を自分の頭で整理して、それが歴史の中でどういう意味を持ち、それが将来の本当に大切な芽になるのかどうか、あるいは阻害要因なのかどうかを考えて、新たな理論を粘り強く構築していかなければならないのです。

エネビシ 私は今までのまとめたものを持ってきました。これからはその意味を明らかにしたり、これを土台に考えていきたいと思っています。

小貫先生 そうそう。一度に完全なものではないから。今の時点でできたものを見てもらって、その上で人の話を聞きながら、あるいは本を読みながら、さらにそれを修正していけばいいのです。今考えているやり方をさらにいいものに仕上げていく。今、そのプロセスにある。どこまでいっても完全なものってないですよ、絶対に。私たちもそうだし、だれもそうなのですよ。自分が納得できるものをまとめたように思っているけれども、それはまだまだ……。

●肉体労働と精神労働

エネビシ 人間はどうやって変わっていくのかというのがずっと私の関心のあるところですよ。

小貫先生 それは重要ですね。人間は何によって変えられていくのか？人間には労働というものがあるでしょう。動物には厳密な意味での労働というのがありません。道具を用いて自然に働きかけ、そこから食べ物とか衣や住を得るというように。人間は労働を媒介することによってはじめて、自己自身を変え、つくりあげていくわけですね。そして労働過程。労働過程を通じて、人間が頭脳を発達させる。人間の頭脳はどんどん発達していく。労働をどう捉え、それを人間生活全体の中にどう位置づけるか、ということ。

今の人は労働を嫌がりますね。それは、命令されてやるから嫌悪するのです。芸術家は、絵筆や彫刻刀などを用いて、同じく労働するのですが、疲れを知らないで楽しくやる。自分がこういうふうにしたらこんな美しく素晴らしいものができあがる、とイメージしながらやる。イメージしながら頭を使い、工夫しながらやる。そこに喜びを感じる。それは肉体労働と精神労働が分離せずに、ひとりの人間の中で統一されているからです。

一方、奴隷は奴隷主が「やれ」と強制するから、ただ嫌々やる。ここでは、精神労働は完全に分離して、肉体労働だけが強制されている。精神労働が欠落した労働が楽しいはずがない。人間労働から精神労働を奪って、圧倒的多数の人間を単純な肉体労働へと追い遣ったのが、近代資本主義の最大の罪悪なのです。大なり小なり違いがあっても、今日のほとんどの人々が本質的にはこの状態にあるのです。この人間労働の問題を、今日の社会を具体的に想定し、いろんなレベルで深く掘り下げて考えていくと、先に触れた「人間はどうやって変えられていくのか」ということに関連してくるのです。このことを含めて、これまでに書いた著書を参考にして考えて下さい。

●社会状況と意識

小貫先生 世界史的に見ても、戦中・戦後の闘いの中から優れた人材が輩出されてきました。ところが、経済が成長してくるにつれて豊かな暮らしを求めるようになってきて、一般市民も次第に自分の私的な狭い生活世界に埋没するようになっていくのです。人間の意識が急速に後退していく。それとともに、西ヨーロッパでは、反ファシズム統一戦線で重要な役割を果たしたフランス共産党もイタリア共産党も衰退していく。20世紀末のソ連の崩壊によって、かつては希望の星だった社会主義思想そのものへの懐疑も急速に広がり、それに代わる新たな未来への道を見出すことができないまま、今日のような混迷の時代を迎えているのです。

長い目で見れば、社会の状況の変化と人間の意識というものは深いところでつながっているのですね。モンゴルの場合も、どういう時代にどういうふうになって来たのか、という社会の状況との関連で、しっかり見ていかないといけない。こういうことが起こったというだけではだめ。どのような社会状況の変化から、どのように人間の意識の変化が現れたのか、ということの詳細を見ていく必要があるわけですね。ただこういうことがありました、だけでは本当のことは分からないのですよ。こういう時代のこうした変化があったから、この人たちはこうやり出したということを裏づけて説明することが大事。大きな時代背景があってネグデルも解体し、地方で生活できなくなったからウランバートルに出てくるようになったのですよね。その社会的背景をもっともっと深めて見ていく必要がありますね。

具体的には、それぞれの家族について、家族構成はどうなっているのか、誰が家族で働いていてど

んな仕事をしているのか、そして実際にはそれぞれどういう気持ちで生きているのか。いくつかの家族モデルを設定し、詳細に調べていく。家族と家族の協力関係はどうなっているのか。地域としてどのようなまとまりあるコミュニティができていくのか。これは地域団粒構造というものにつながる問題ですが、このことは重要なので後でもう少し詳しく説明したいと思います。

●家族

小貫先生 伝統的な家族の絆というのをベースにしながらも、地方から移ってきた遊牧民は新たな都市の条件のもとで生活するのですから、家族のあり方も変わってきますね。

エネビシ ウランバートルの人口120万の多分60%がゲル地区に住んでいます。

小貫先生 ウランバートルの市役所に行けば、人口の変化については統計があるはずだから、それを調べないと正確な変化は分からない。

人口の数の変化だけではなくて、移住してから職業はどのように変わってきているのか、ということも。公務員になっているのか、工場労働者になっているのか、日銭を稼ぐ何かをやっているのか。実際には様々な仕事をしているはず。まずは統計的に調べて、それだけでは実態が見えないだろうから、一応調べた上でいくつかの典型的な家族を設定し調査して、その家族の構成を見る。例えば長男はウランバートルの市役所に勤めている、次男は工場に勤めている、長女は看護師さんをやっている、とか。あるいは三男は定職が見つからずふらふらしている、とかいろいろあるでしょう。

そして、その中から特定の家族を選び、家計としてどのぐらいの現金収入があって、支出がどうなっているのか。物価の変動も統計資料からを調べないと、歴史的な考察にはならない。結局、家族の構成と家計を詳細に見ていく必要があるのです。いろんなタイプの中から、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプ・・・と、その典型的なタイプを設定して、詳細に分析していく。

小貫先生 その時に大事なのは、国全体の状況。国全体で収入、支出はどうなっているのか。つまり、歳出、歳入はどうなっているか、その具体的内容を年々の変化を辿って見ていく必要がある。さらには、どんな新しい産業が生まれているのか。たとえば工業といっても食品加工業もあるし、カシミヤを作っているものもあるだろうし、自動車の部品を修理しているところもあるだろうし、そういうものを分類した統計があるかどうか調べてみる。国全体の大枠のあり方とウランバートル市だけの収入と支出。国の財源がどのぐらいあって、そのうちウランバートル市にどのくらい配分され、その他の地方へはどのようになっているのか。そもそもモンゴルは遊牧の国と言っているけれど、畜産品でどれぐらいの収入を上げているのか。鉱工業でどれだけ収益をあげているのか。税収はどうなっているのか等々、国全体について統計資料で調べることができるでしょう。

こうしたことを大きな枠組みとしておさえておかないと、モンゴルの国と人々の生活の実態は、正確につかむことはできないのです。

こう把握した上で、一番大事なのは最終的には、具体的で詳細な家族構成と家計ですね。そういうものをきちんと調査・分析し論文にまとめれば、それを読んだ人は理解しやすく、説得力がある。モンゴルの国と人々の生活は、今こんなふうになっているんだなあ、と。

エネビシ 10月13日から2週間帰国してきます。その時にそれを念頭において調べてきます。

小貫先生 インターネットでキーワードを入力して検索し、必要な資料を集め、準備しないといけないですね。国全体の産業構造、そして歳出、歳入。ウランバートル全体について、さらに地区ごとに。特に自分が対象に調査している地区の詳しい状況。そういう枠組みを作らないといけない。大方針を

立ててこうしたものを調べた上で、先に述べた括弧つきの「地域」の内部を詳しく調べ分析して、こうなっていますよと、現地での調査をもとに細かいところまで書く。こういうやり方になると、研究は格段に深まっていくのです。

●時間の流れ、歴史の中で捉え考える

小貫先生 これら以外に、もう一つ大事なのは、『遊牧社会の現代』、『モンゴル現代史』を参考にしながら、時間の流れ、どういう歴史の中でこのような変化が起こってきたのか、という具合に。国の財政も、家計も。そうすると「あ、今のモンゴルの鉱工業を中心にしてやっているやり方でいいのだろうか」という疑問が出てくるわけです。「遊牧民や都市の労働者の家計は、ますます苦しくなっているんじゃないの」とか、「国の方は産業が上手くいっていると言っているけれど……」といった疑問。そうした考察がしっかりできるようにならないといけなのではないでしょうか。

【小貫先生の著書『菜園家族の思想 甦る小国主義日本』³⁾(かもがわ出版)から】

小貫先生 日本では2011年に起こった東日本大震災、これは時代を画する大きな出来事でした。いろんな問題が噴出してきて、その後も大変な状況になっている。原発も国民の切なる声を無視して再稼動することになっちゃったしね。だけどこのことをしっかりおさえておかないといけません。こういう問題がその根源にあったのか、ということをもつとこの本のプロローグのところに書いてある。

3・11東日本大震災は、高度経済成長の延長線上に起こったと見るべきです。ただ単なる自然災害では決していない。家族が衰退し、地域が空洞化して、家族の力が、そして地域の絆が失われてしまったところに自然災害が起こったから、その被害がいっそう過酷なものになったと見るべきなのです。加えて原発による被害は、人災そのものと言うべきです。

これをおさえた上で、あらためて近代の淵源に立ち返って考える。というのは、近代というのはイギリス産業革命以来の資本主義の時代ですね。その淵源、つまり根源に立ち返って考えていかないと。この本では、なぜ近代に遡るのかという理由も書いています。

要するに、資本主義がどういう「かたち」で形成されたか、ということ。それでその中で19世紀のイギリスでは、いろんな捉え方が現れてきます。

太古の人間社会の共有、平等、自由の自然状態を歪めてきたものは、何であり、誰であるのかの疑念が深まれば深まるほど、やがてその考えが科学に転化していくのは、ごく当然の成り行きであったのです。むしろ、人間に本来の基本的な人権とは何か、自然と人間、人間と人間との関係を律すべき原則とは何か、資本主義経済のもとでの人間と自然の疎外や荒廃の原因は何なのか、その究明へとむかっていくのです。まさにこうした人類史の基底に脈々として流れる自然権にもとづく根源的な思想を受け継ぎ、19世紀初頭以降のイギリス資本主義の新たな発展と、こうした時代状況の中から新しい思想家、実践家が現れ、新たな思考が、思想が世界的にも輩出してくるわけですね。

特にイギリスでは、生産手段の共同所有に基づく共同運営という目標を掲げ、ニューラナーク、そしてアメリカ・インディアナ州でのニューハーモニーというコミュニティの実験がはじまるのです。これはロバート・オウエンという人が試行錯誤しながらも、結局は失敗に終わります。ソ連社会主義崩壊のはるか2世紀半ほど前のことでした。20世紀ソ連社会主義建設の失敗を先取りしたものと位置づけられるものでした。

こうした人類史上の苦い経験から学び、19世紀の後半になって、新しい思想と理論が出てきます。

3) 『菜園家族の思想 ―甦る小国主義日本―』(小貫雅男・伊藤恵子、かもがわ出版、四六判・384頁、2016年)

それがマルクスの経済学研究とその集大成である『資本論』です。これによって、資本主義経済の原理が、その内部矛盾やその歴史性と合わせて体系的に解明され、その結果、古典派経済学のせまい限界をはるかに超えて、歴史科学としても優れた経済学の原理論が確立されたのです。それではマルクスは、未来社会をこの時代にどのように構想したのか。その基本は先と同じく、生産手段の社会的規模での共同所有を基礎にした共同管理・共同運営であったと言って間違いないと思います。ソ連とモンゴルの社会主義体制は、このマルクスの未来社会構想を基本的には踏襲していたのです。

ところで、ここでまず、未来社会論についての今日における研究状況がある程度、知っておく必要があるでしょう。今日の方の研究者は、資本主義の終焉^{えん}を唱えながらも、それに代わる未来社会を提示しえないでいるか、あるいは未来社会については、まったく無関心であるか、それとも無関心を装っているか、あるいはまた革新的と言われている大方の研究者も、結局、19世紀のマルクスの未来社会論に基本的には依拠し、その枠内にとどまっていると言ってもいいのではないのでしょうか。このことをまずはじめにおさえておきたいと思います。

そこでここからは、マルクスは未来社会をどういうふう考えていたのか、ということを考えていくのですが、未来社会論そのものに限ってはマルクスが遺した具体的な叙述は、余りにも少ないのです。ごくわずかにしか書かれていない。系統的、体系的には叙述されていないのですね。マルクス未来社会論の基本となるものは、結局、生産手段の社会的規模での共同所有、これを基礎にした共同管理・共同運営が基本であったことは間違いないでしょう。

エネビシ そうすると先生、モンゴルのネグデルはそうだったんですね。

小貫先生 そうそう。マルクス未来社会論の系統を基本的には踏襲していると言ってもいいのです。それで、社会的共有化理論というのはどのような成立条件のもとでできたのか、ということ。私たちの今の時代に、この19世紀の未来社会論をどういうふうに批判的に総括し、そのうえで正確に継承発展させるかということが、とても大切になってきています。モンゴルのネグデルやソ連も基本的には、マルクスの言っている社会的共有化論、つまり生産手段を社会的規模で共同所有して共同管理・共同運営するという、この19世紀の理論に基づいたものでした。20世紀に実践に移された社会主義体制の限界と欠陥は、既に19世紀の未来社会論そのものの中にあっただということ、理論的にも。

だけど、マルクスが悪かったわけではなくて、今から2世紀ほども前の19世紀という時代状況の中で、必然的に生まれてきた問題なんですよ。このことだけは、公平にしかも正確におさえておく必要があります。この限界と欠陥を克服できず、20世紀になって、みんなこのことをはっきりさせないで、ソ連でもモンゴルでもやって来た。ネグデルもその理論に依拠してやってきた、ということなのです。このことをはっきりさせない限り、21世紀の今日、行き詰まり混迷を深め、のっぴきならぬ窮地に陥った私たちのこの社会そのものを、建て直すことはほとんど不可能に近いのではないかと。こうした時代認識のもとに、この本を書いています。ここから本論に入るわけです。

さて、20世紀の私たちの社会は、一体どのような状況下に置かれていたのでしょうか。市場経済、そして地球を丸ごと席捲するグローバル市場経済がますます隆盛になり、民衆の生活は徹底的にその荒波に翻弄されていきます。これに対抗するためには、民衆はどうすればいいのか。今日、このことが民衆にとっての最大の課題となっているのです。それは、私たち自身が、私たちの生活の場である「地域」そのものを、そして私たち自身を主体的にどう変えていくか、という問題なのです。結局それは、自らを抗市場免疫の体質につくりかえていくことです。これこそが、21世紀民衆に負わされた最大の

課題であり、最大のテーマなのです。

だから今こそ、この考えを基本に据えて、19世紀のマルクス未来社会論に代わる、21世紀の私たち自身の草の根の未来社会論を探究していかなければならないのです。そのためには、従来の歴史観に代わる、21世紀の新たな歴史観に基づく新しい思考、新たな研究方法を編み出していく必要があるでしょう。これからの21世紀未来社会論に欠かせないものは、「地域研究」の視点なんだということ。社会をトータルに把握し、未来社会を全面的に構想するためには、狭い従来型の「経済学」だけではだめだということ。そこで、21世紀の未来社会を構想するためには、新たな「地域研究」の視点、つまり民衆の草の根の地域未来学研究⁴⁾の確立がどうしても必要になってきます。このことをこの本では強調しています。

さて、この本の第2章からですが、そこでは、私たちが生きている時代はどんな時代であるのか、このことを日本の現実から出発して述べています。日本の現状は、まさに「いのち削り、心病む、終わりなき市場競争」。民衆は市場に振り回され、苦しんでいる。こんな時代になってしまったのです。こうした中で、家族は疲弊し、いよいよ衰退していく。

日本の高度経済成長は、1955年頃からはじまるのだけど、それ以前の日本の暮らしはどんなものだったのか。日本列島を縦断する脊梁山脈を源に発する森と海を結ぶ流域地域圏が形成され、そこでは流域循環型の大小さまざまな地域が息づいていた。森の幸は川下へ運ばれ、平野部の幸は川上へと運ばれていった。森の木材とかキノコなどの物資は川下へ、平野部のお米や野菜などは奥山へと運ばれていった。こうしたモノとヒトの循環が成立していたわけですね。こんな時代も、戦後高度経済成長以前のつい最近までであったのですよ。

長いスパンで日本の歴史を見ると、確かに人々の暮らしの“場”は、森から平野への移行が一般的な趨勢なのですが、今日では森の方は過疎・高齢化が進み、家族や集落がどんどん消えていく。今や平野部の都市でも少子高齢化が進み、介護問題などもますます深刻になっている。その上、経済も低迷し、日本は今や修復不能に陥っている。みんなそれに気づいていないんだけどね。あるいは怖いから知らぬふりをしているのかもしれない。こんな時代だからこそ、「家族」と「地域」の問題から出発して、社会全体を深くトータルに考察していくことは、とても大事になってきているのですね。「家族」と「地域」のメカニズムをその原理から考えていく。この本では、こうした方法を探究しているのです。

ですから今日の社会再生の鍵は、「家族」と「地域」であり、これを基軸にして考えていくことです。もちろんある時には「経済学」の側面からも考えることも必要でしょう。しかし、社会の根っこの基盤の体質そのものが腐りきってしまった時、まず手はじめにすべきことは、社会の基盤である「家族」と「地域」からどうやって修復するかである。これを抜きにして、社会の歴史的変化の決定的な要因が唯一経済にあるとする硬直した経済決定論の観念に囚われ、従来の細々とした「経済学」のうわべだけの手法をそこにいくら施しても、それはまったく徒労に終わらざるを得ないことは分かるはずです。

目先の枝葉末節にとらわれずに、今あらためて根源的に考えなければならない時にきていると思います。人間とは何なのか、家族とは、地域とは何なのかということを。そうしないことには、21世紀の本当の草の根の未来社会構想は生まれてくるはずがない。そこでこの本では、21世紀の未来社会構想、すなわち「菜園家族」構想を基礎に、新たな経済・社会のあり方を模索し、提起しているのです。

4) 『静かなるレボリューション ― 自然循環型共生社会への道』(小貫雅男・伊藤恵子、御茶の水書房、2013年)の「未来社会論に欠かせない地域研究の視点 ― 新たな地域未来学の確立」132-135頁をぜひお読みください。

「菜園家族」と同じく、家族小経営である「匠商家族」についても、この構想では大切な一翼を担っているのです、これとの関連でも述べています。「匠商家族」には、小売業をしている家族もいるでしょう。あるいはレストランや喫茶店や食堂などをやっている家族もいれば、手工業をやっている家族もいるわけです。こうした家族は、大都市だけではなく、森と海を結ぶ流域地域圏の中核に当たる地方の中小都市でも生活しているのですよ。この辺りで言うと小さな城下町彦根みたいな。

モンゴルの都市部でも、そこに住む家族はどんなふうにし計を立てているのか。手工芸をやっている家族もいれば、商売をやっている家族もいる。そういう家族の実態を知るとともに、これからのあるべき姿を考える必要があるでしょう。

「菜園家族」を基調とするC F P複合社会については、この構想の核心的肝とも言うべきものであるのです、特に注目してもらいたい。資本主義セクターをセクターC (Capitalism)、家族小経営セクターをセクターF (Family)、公共的セクターをセクターP (Public) とし、この3つのセクターによる新しい複合社会をC F P複合社会として構想しています。セクターFは「菜園家族」や「匠商家族」。セクターPは公共的な経営体や組織、公的な機関です。たとえば協同組合や、地方自治体の公営企業や国営企業も含まれます。C F P複合社会が進展していくにつれて、家族小経営セクターFが繁栄増大へとむかい、これに伴って資本主義セクターCは漸次縮小、消滅し、遠い未来にはF、P二つのセクターからなる高次自然社会へと到達していくのです。人間が自然に溶け込み、人々が笑顔で自由に暮せる新しい社会が生まれてくる。大まかに言うところこういう展開になっているのです。特に、賃金労働者の生存形態が「菜園家族」や「匠商家族」など家族小経営への転換がすすむにつれて、なぜ資本主義セクターCが漸次縮小・消滅へとむかうのか。その詳しいメカニズムについては、『菜園家族の思想』の第八章「「菜園家族」の台頭と資本の自然選行的分散過程」を後で、じっくり読んでみて下さい。

【小貫先生の著書『モンゴル現代史』⁵⁾(世界現代史4 山川出版社)から】

小貫先生 これは1993年に書いたものです。モンゴルでは社会主義のネグデル体制のもとで、1980年代末に家畜頭数の増加が停滞してしまう。1960年代、70年代は順調に増加していったのが、80年代の末期になると増えなくなって来た。その大きな原因として僕が考えているのは、結論から言うと、結局、本物の民主主義の欠如に尽きるんだと思っている。それを克服するには、個人の中に宿る創意性を引き出し、それを最大限に活性化し、社会生活の全分野において生き生きとした生命を甦らせるための、具体的かつ創造的なシステムの構築が大切だと考えているのです。

この本をまとめた1990年代初頭とは、世界全体から見ても、ソ連が崩壊し、やがてアメリカが後退していくについて、世界は全般的に「国家」の時代から「地域」の時代へと移行する可能性を秘めていた時代でもあったのです。こうした時代において求められていたのは、民主主義を単に形式的に捉えるのではなく、人格解放へと全面的に展開していく中で、個人の確立を可能にしていくことであったのです。そのためには、人間の生活、そして生産の場でもあり、人間を育む場としての「地域」の構築が重要になってくるのです。硬直した旧社会主義体制が崩壊した当時、その可能性が現実のものになりつつあったことを、ツェルゲル村の遊牧民たちの自主的な地域再生の模索を踏まえて、この本『モンゴル現代史』は描いたのです。そして何よりも、それを「家族」と「地域」の問題として捉えています。

この本の基軸に、なぜ「家族」と「地域」を据えたのか。そして、なぜ「家族」と「地域」を中心にして考えていかなければならないのかということなのです。これはかなり以前から、モンゴルの遊牧地域

5) 『モンゴル現代史』(小貫雅男、山川出版社、四六判・336頁、1993年)

の調査研究の中から汲み取ってきたものなのです。思いつきで偶然に「家族」や「地域」を取り上げているわけではありません。

エネビシ モンゴルの場合、1990年代以降、ただちに日本と同じではないけど、牧畜を重視しなくなってきた。鉱山開発を中心にしていくなかで、地域も解体されてきたんだというふうに。それで、日本の場合と何か共通性があるのではないかと。そうすると、日本の高度経済成長以降に、地域がどのように衰退していったのか？それを地域の方から乗り越えて、どのようにしてそれを取り戻そうとしているのか？を見る必要があるのではないかと思ったのです。

小貫先生 日本とモンゴルの共通の問題としてエネビシさんの考えていることを、現実のうえでも、理論的にも詳しく述べていく場合に、この本や『菜園家族の思想』を読むとその肉付けができるのではないではないでしょうか。

●菜園家族

エネビシ モンゴルの場合、今人口の半分以上が、定住地域に集中してきている。ウランバートルだけでなく、県の中心地とか、定住地への移住が進んでいる。そこで新しいタイプのコミュニティができていくのはこれからだと思うから、その時に何を強みにしたらいいのかということが、またひとつ、課題なのです。

小貫先生 日本の問題として考えるならば、基本的には、「菜園家族」という概念はどういうものであるのかということ。「菜園」というのは、自己にとって生きるに最低限必要な小規模な畑や田んぼを指しています。それを基盤にした家族ということ。

ところで、権力の強制による今の日本の経済のあり方、その中での農業の現実を考えると、農業だけではやって行けないから、ほとんどの農家は週に5日間、会社などに勤めながら賃金を得て、残りの土・日の2日間で農業をこなしている。これを一般に兼業農家、あるいは土・日農業といっているのですが、これでは前向きで創造的な楽しい農業など望むべくもありません。土・日曜だけでは田畑の仕事をこなせないから、トラクターやコンバインなどを買う。その農業機械がものすごく高い。そのほか化学肥料・農薬やガソリン代とか費用がかさみ、今の農業は赤字になってしまうわけです。これでは日本の農業の未来はありません。耕作放棄地は増える一方で、広大な山林は荒れ放題だ。集落は崩壊し、空き家は放置されたまま。ですから、このままでは、若者に帰農を勧めても無理です。

こうした無駄をうまく活用しながら、都市から農村への移住を本気になって地方自治体や国の政策として促していくべきです。人口を大都市へ集中させるのではなく、自然豊かな国土に分散して、それぞれが楽しく豊かに暮らしていく。その具体的な方法が、週休 $(2 + \alpha)$ 日制(但し、 $2 \leq \alpha \leq 4$)の「菜園家族」型ワークシェアリングなのです。週の何日か、2日か3日、会社に勤め、それ相応の賃金を得て、その賃金プラス自己の田畑で育てたもので生活すればいいのです。自分の自由な楽しい時間を取り戻し、自分らしい暮らしの基盤を築き上げながら、それぞれが多様な自己を実現していくのです。こうした中で、大人も子供もお金儲けばかりにあくせくすることなく、豊かに人格は形成されていくのです。

エネビシ そうですね。私も、日本のテレビみたら何かおかしくなりそうで。犯罪ばかり出てくるから。

小貫先生 このままでは人間の精神がますます劣化していく。衰えていく。こうした中から極端なケースが生まれ、異常な凶悪犯罪へと追い込まれていくのです。それは、なんでだろうか。結局、人

間が大地から離れてしまったからです。山村や農村でも少子高齢化が進み、今は70代、80代のお年寄りが農業をやっている。若者は都会に出て、うわべだけのオシャレをせっせとして浮かれています。

エネビシ モンゴルでも、都会では外国の有名ブランド店が次から次へとできて、今のモンゴルでは借金を抱えていない家族はいない。マンションのローンとかそれぞれあって、どうやって返すかということに精いっぱい、自治とか地域のことなど関心をもたないし、田舎だったら遊牧民も家畜を担保にして銀行に借金している。

小貫先生 「菜園家族」構想は、まさに人間が根なし草になった状態から、もう一度、大地に根ざした素朴で精神性豊かな暮らしの基盤をとり戻そうという考え方なのです。

エネビシ 本来モンゴルはそういうはずだったのに、今は逆の方向にきていて、人の精神も変わってきているし。あまりにも物質的なものを求めすぎる。でもそれでは駄目だという考えも出てきている。今は分断されているような気がする。現状に疑問を持つ人もいるが、どうしたらいいのかわからない。一方で、モンゴルは遅れていると考えている人もいる。何でアメリカや日本のようにしたいけないのかと。

エネビシ 社会主義もぜんぶは悪くなかった。特に協力とか、みんなで得た利益を平等に分配するとか。そこを今もう一度見直し、どうやって取り入れるか考え直す必要があるのではと。

小貫先生 「分配」のことを日本では「ばらまき」とも言うんですよ。国民の不満に対して、「選挙」でばらまきをやるんですよ。巨大公共事業などを都市や地方で具体的に「こうします」と、「選挙」で公約する。それにつられて票を入れるわけです。目先のあめ玉をちらつかせるのではなく、本当はこの国の遠い将来を見据えた政策を提示し、議論をたたかわせるものであるべきですね。

根なし草になった人々には、ちゃんと自立していける基盤そのものを保障することがまず何よりも大事なのです。広い意味での「菜園家族」的インフラですね。そのための法制を整えていくことです。このまま放置すれば、農家そして農村の集落は消滅していきます。最近では、農村だけではなく大都市においても、老老介護など深刻な問題が続出してきていますね。エネビシさんたちも、日本の新聞などの報道で目にしているでしょう。一見、大都会の賑わいからは想像できないのですが、日本の現実実は極めて深刻なのです。

こうした深刻な事態に目を向けず、大企業を優遇し、軍拡に多額のお金をつぎ込むこの国の政治とは、一体何なのでしょう。

基本的、本質的にはモンゴルの状況も同じではないでしょうか。モンゴルはモンゴル独自の道がひらけていくはず。その道を探究することが、エネビシさんたち若い研究者の課題なのです。決して臆せず研究を重ね、どんどん提案していくことですね。

エネビシ この本の中で先生は、19世紀東部モンゴルのト・ワン・ホショーのことを取り上げています。時代、時代へと引き継がれているんですね。ト・ワン・ホショーの事例も、盟長から自立した地域の運動で、そこに住んでいる人々が何を望んでいるかということ、それが実はある意味では、今日までつながっているんですね。

小貫先生 19世紀前半の時代のト・ワン・ホショーでやったこと。改良的なト・ワンという領主が、今から思うと実に目を見張るようなさまざまな創意工夫を試みたのです。牛を改良したり、小学校を作ったり、小麦を栽培し製粉工場を作ったり、手工芸なども奨励したり。モンゴルの封建時代にあって、そういうしたたかな事業が現実にあったのですよ。

ところが、それがボグド君主制国家(ボグド・ハーン・オルス)に引き継がれたものと、引き継ぐことができなかったものがあった。ボグド君主制国家では、議会まで設立する。それも上院、下院の二院制。それはヨーロッパの近代的な制度をいち早く取り入れようとしたのですね。こうした先進的な側面もあった。しかしこの国家は、ある意味では、清朝の冊封体制の中であって、限界があったわけですよ。当時としては先進的な側面もありながら限界があったのは、その本質が封建領主の連合体の権力によるものであったので、当然とも言えます。仮に遊牧民の新しい政権であれば、上から目線ではない、本物の草の根の民主主義の可能性は大きくひらかれていたかもしれない。しかし、そうではなかった。

21世紀の今日の時代において、遊牧民の「家族」、ホタ・アイル共同体、「地域」へと至る地域基盤の中で、本物の草の根の民主主義の土壌が形成され、より上位の民主的政府の実現へとつなげていく。それには非常に長い時間がかかるけれども可能であり、かつ、忍耐の要るこの長いプロセスは絶対に必要だということを歴史の経験が教えてくれているのです。

エネビシ そういう民主主義の伝統、「未発の可能性」がモンゴルにもあったということですね。

●団粒構造

小貫先生 本来、どんな人間でも、人間には不公正を嫌がる意識が強烈にある。人間には本来、平等を要求する意識というものが自然なものとしてそなわっているのですよ。民主的なものへの欲求、人間の本来的な平等への欲求、それを制度的にどう結実させていくかという組織論の問題として探究していけばいいのです。これは、今日切実に求められている大きな課題なのです。

このことを「団粒構造」という土壌学で言うところの言葉を使って説明すると分かりやすくなりますよ。

粒(つぶ)と団子。粒は個々人です。ここに具体的なひとつの家族を想定しましょう。家族は父と母、子供、祖父母のそれぞれの粒(つぶ)から成り立っています。家族もこのように個々人の粒(つぶ)から成り立っている団粒なのです。したがって家族は第1次元の団粒。次に、この家族が3つとか4つとか集まると、日本で言う「くみ」になる。モンゴルで言うホタ・アイル хот айл です。ホタ・アイルは、したがって第2次元の団粒にあたります。次にこのホタ・アイルがいくつか集まると、ヘセツグ хэсэг 日本で言う村という第3次元の団粒が生まれ、こうして地域団粒構造が重層化されていく。この第3次元の団粒ヘセツグ хэсэг 村がいくつか集まると、郡すなわちソム сум になり、これが第4次元の団粒になる。この郡すなわちソム сум がいくつか集まると第5次元の団粒アイマック аймаг すなわち県となる。さらにこのアイマック(県)がいくつか集まると第6次元の団粒ウルス улс (国)となるのです。このように1次元、2次元、3次元、4次元、5次元、6次元と、地域団粒構造はいっそう重層化していきます。

このように地域の構造の展開過程を見てくると、一番基礎的で大事なのは、第1次元の団粒の「家族」なのです。モンゴルでは、家族の成員はとても仲がいいですね。何かあったらみんな集まって来て、協力し合ったり、楽しんだりするでしょう。それはなぜか。いつも広大な厳しい自然条件の中で生きるために頑張っているからです。これが大事。

でも、一家族だけでは生きていけません。なぜかというと、モンゴルの自然はある時には死に至るほど過酷なまでに厳しい。家族と家族が共同しなければ生きていけないからです。だから、第2次元の団粒であるホタ・アイルは不可欠なのです。

さらにホタ・アイルだけでできないことは、もっと上位の大きな団粒、第3次元のヘセツグ(村)や第4次元のソム(郡)でやることになるのです。村のレベルだったら小学校の分校ぐらいは置けるよ、という話にもなってくる。

地域団粒構造は、さらに上位の次元へと多重・重層化していく。郡が集まると県になるのですね。国というのは、この県がいくつか集まって形成されるのです。これを地域団粒構造の多重・重層化の展開過程と名付けています。まさにこれが、草の根民主主義が育つ土壌になるのです。ここではじめて、本物の民主主義が生まれてくるわけです。

家族の中でも、話し合わないと仕事にならないでしょう。ホタ・アイルもそうです。話し合いがなくてそれぞれが勝手なことやったら、「それはいかんぞ」とか、「ああしよう」とか「こうしよう」とか、議論がはじまるのです。生きていくために、生活と生産に根ざした話し合いが必ずはじまるのですよ。

「話し合い」、これが民主主義の源泉であり根源なのです。これがなかったら、民主主義は空想と化して死んでしまう。これがないところで形式だけを整えて「選挙」をやったんじゃ、それはお任せの嘘っぱちの民主主義になってしまうに決まっている。だから、社会の基底部にこうした地域団粒構造が生まれてこないと、民主主義は衰退し死んでしまう。これには時間がかかりますよ、一気にはできません。5年、10年、20年、50年と苦闘の歴史を重ねながら、本物の民主主義は育まれ、花開いていくのです。

エネビシ モンゴルの伝統的な社会の中には民主主義が生まれ、育つ土壌がある、ということが先生の論文などで語られてきている。先行文献として。こういう歴史や背景があるから、今度は新しいタイプのコミュニティが出来ていく中で、基本にはこうした地域団粒構造がないといけない、ということですね。

小貫先生 これはモンゴルだけじゃなくて、日本の場合についてもそうなんです。これは自然界の生成・進化の原理、法則なんですよ。団粒構造というのは土壌学の理論です。土の学問。さらさらとした砂は単粒構造で、植物が育たないのです。雨が降っても、サーと一気に洗い流されてしまう。栄養分もここには溜まらない。団粒構造になると、団粒と団粒の間に隙間がいっぱいできて、その隙間には水分や空気や栄養がたくさん含まれる。酸素がないと微生物は繁殖しないでしょ。隙間では微生物がいろんな有機物を分解し、土の中のさまざまな生き物の栄養になるわけです。団粒構造のふかふかとした土というのは、栄養分が豊富で植物がよく育つ。この団粒構造の土の中では、微生物からみみずなど小さな生き物に至るまであらゆる生き物がそれぞれ自分が生きるために個性あるやり方で自由に生きながらも、結果として土はふかふかとした植物がよく育つ豊穡な土壌に仕上がるのです。だから、豊かな地域団粒構造の社会では、人間も同じようにのびのびと豊かな人格へと育っていくわけです。

このように、人間社会においても自然の哲理、自然の法則は貫かれていると見るのです。このことは頭の中で考えたことじゃなくて、自然そのものがそうなっているということなのです。

土壌学で言うところの団粒構造も、実は、宇宙や極小の世界の“場”に似せて、多重・重層的に作り上げられたものではないか、と考えられます。つまり、自然界の摂理とも言うべき「適応・調整」の原理が、自然界の中での次元はかなり異なっているものの、土壌の世界においても貫徹し、具現化されたものではないか、ということなのです。あるいは、むしろ団粒構造そのものが、土壌に限らず、分子や原子や素粒子などの極小の世界から惑星など宇宙の極大の世界に至る、あらゆるレベルにおいて現れる“場”の普遍的構造である、と言っているのかもしれない。

ところで、仮説としての「適応・調整」の原理は、生物複雑系科学の第一人者であるアメリカのスチュアート・カウフマンが唱えている「自己組織化」の原理と、奇しくも本質的な部分で重なることが多いことに驚かされています。ただし、ここでは、自然観と社会観の分離を排し、両者合一の思想をすべての基礎に置く立場からすると、「適応・調整」の原理は自然界のみにとどまらず、人間社会にも敷衍して適用される普遍的原理であるとしている点が、大切なミソになっているのです。

小貫先生 自然界はもともと団粒構造で成り立っています。ところが、人間社会だけはその中であってそれに反する方向に向かおうとしているわけです。だから、自然界の法則とぶつかってしまう。人間社会はまさにがん細胞みたいなもの。別次元の原理、論理で生成・進化しようとしている。だから宇宙全体の中で、地球上の人間社会だけががん細胞のように異常発生し、増殖と転移を繰り返しているのです。人類の社会は悪性のがん細胞なんですよ。だから将来、人間の社会を本来の正常なものに戻そうと思ったら、自然界の生成・進化の普遍的原理に合わせて「団粒構造」につくりかえていかなければならない。これは、人間社会をこの哲学的立場から根源的に捉え直そうとする試みなのです。だから、いい加減に思いつきで勝手に団粒構造にすればいいと言っているのではなくて、私たちの自然界、宇宙そのものが団粒構造で成り立ち、出来上がっているということなのです。

自然界の中であって、人間社会だけがまったく別次元の原理、すなわち「指揮・統制・支配」の特殊原理によって生成・進化を成し遂げようとしているその根源的な理由については、『菜園家族の思想』の第三章「人間はなるげくして人間になった－その奇跡の根源に迫る－」をじっくり読んでください。同時にこの第三章では、「菜園家族」構想、つまり21世紀の未来社会構想としての独自性と優位性はどこにあり、それを決定づけている根底にある考え方は何なのかについても、人類史における「家族」のはたす根源的な役割とその意義の側面から考察し述べています。

ところで、「適応・調整」の原理については、「菜園家族」構想、つまり21世紀の未来社会を構想するうえで、肝の核心部分に当たるものなので、あと少しだけ付け加えておきましょう。

物質あるいは生命のすべての存在は、それぞれが分子や原子やさらには小さい素粒子の「極小の世界」から、生命世界のDNAや細胞核や細胞、そして生物個体から生態系への一連の生命系、さらには惑星や太陽系や銀河系など宇宙の「極大の世界」に至る遠大な系の中の、いずれかのレベルの“場”に位置を占めています。これは、「自然の階層性」と言われているものですが、物質あるいは生命のすべての存在は、素粒子よりもさらに深遠な量子エネルギーのレベルで働く共通の広大無窮の“場”にあって、しかも宇宙や自然界の多重重層的な“場”の構造のそれぞれのレベルの“場”において、外的環境の変化に対しては自己を適応させようとして、自己を調整し、自己をも変革させようとするものなのです。

つまり、この宇宙の量子エネルギーの広大無窮の“場”にあって、物質あるいは生命のすべての存在には、究極において何らかの首尾一貫した統一的な“力”が絶えず働き、貫かれていると考えられるのです。自然界の摂理とも言うべき、まさにこの統一的な“力”こそが自然界の生成・進化のあらゆる現象の深奥に潜む源であり、これが宇宙や自然界のあらゆる現象を全一的に律する「適応・調整」の普遍的原理なのです。

これは先にも触れたように、生物分子学のスチュアート・カウフマンの「自己組織化」の原理と奇しくも重なる部分が多いのですが、いざこの「適応・調整」の原理を人間社会の問題にまで敷衍して適用するとなると、その重大な意義については、日本の研究者はなかなか理解しないのが現状ではないで

しょうか、今のところは。

エネビシ これは人間社会の形成の問題ですが、これを見ていくには、ただ経済学とか社会学とかだけでなく、広くいろいろな学問の領域から見ていかないといけない。

小貫先生 今の問題は、経済学は経済学の範疇だけにこだわり、そのみで人間社会すべてを処理し解決しようとするか、あるいはそれが可能だと思込まされているからですよ。しかし、人間社会はきわめて複雑で、「経済学」の論理だけで動いているわけではない。そこには自然があり、人間社会があり、その基底には「家族」や「地域」があり、そこでのさまざまな要素が絡み合い、複雑、有機的につながりながら動いているのです。そこには、経済の論理だけでは処理できない動きがある。もちろん、ある時、ある面では「経済学」の論理は必要だし、有効でもある。しかし、こういう社会に対する包括的な基本的考え方が欠落しているから、「経済学」はたかだか10年先の予測すら当たらないのです。ましてや人間社会を歴史的に、そして多面的、全体的に把握しなければならない未来社会論となれば、21世紀の今日に至っても、まったく五里霧中のただ中にあるのも至極当然のことなのかもしれませんね。

だからなおのこと、今日の社会の不条理に苦しむ若者こそが、そこに挑む生きがいを感じてほしいのです。それは、自らを「研究者」という狭い枠にはめ込むことでもない。21世紀を生きるひとりの人間として、自らのすすむ人生の指針を自由自在に考え見出していくことであり、まさにそれは、生への飽くなき根源的な営為とも言うべきものです。それが成しえた時、人間としての本当の喜びがこころの奥底からひたひたと満たされてくる自分自身がそこにいることに気づくはずですよ。

●未来に向かって提案する

小貫先生 ここでは広い意味での「社会科学」の研究者についてですが、研究者は未来に向かってどういう提案ができるのか。まず何よりも、過去の権威に囚われずに、具体的な現実世界から出発すること。研究者は、社会変革の未来への道筋を具体的かつ大胆に提示していくこと。混迷している21世紀の今だからこそ、特にこのことを強調したいのです。

若い人たちはどうしても都会的な目新しい文化、アメリカ発のうわべだけのライフスタイルに憧れ、自分の足元から崩れていく現実気がつかない。気づくと不安だから気づかないふりをしているのかもしれない。そして、知らず知らずのうちにそっちに流されていく。しかし、研究者は、そして研究者に限らず人はみな遠い未来を見据えて、自分の思ったことを率直、正直に主張していかなければならない。そして、一人でも多くの人に伝えていくことです。それが研究者、そして人としての大切な一つの使命だからね。

言ったからといって、すぐ世の中は変わるわけじゃないけれども、そういう自分自身の考え方を言い続けることが大事。それをやるかやらないかによって、何年か経った後にきっと大きな違いが出てくるはずですよ。納得する人も時代の流れの中で必ず現れてくるでしょう。多分、今のモンゴルの状況では、いろんなことを提案しても、すぐには「うん」とは言わないと思います。分かるでしょう。

エネビシ でも今はちょっと危機感というか、これだと駄目だという緊張感が結構、高まってきている。これじゃなかったとか、民主化後に望んでいた社会というのはこれじゃなかったとか、騙されたみたいなど感じて。

小貫先生 民主主義ということの本当の意味は、先の団粒構造の中で言ったように、もっと深い意味があって、「選挙」で議員さんを地方議会や国会に送り出して、それでお偉い先生たちにやってもら

う。それは本来の民主主義とは違うんですよ。それはただ単に錯覚しているだけです。これほど嘘っぽい欺瞞の民主主義もないのです。本当の民主主義とは、どうやって自らの社会のあり方を先の草の根の団粒構造につくりあげ、その中で本物の民主主義を育てていくかなのです。そして、その原理を示さないといけな。その原理を示しつつ、具体的にモンゴルではこうやっていけるんじゃないかということ、都市の研究者や一般の市民だけでなく、遊牧民たちとも共に過去の歴史的経験を省みながら、いろいろと語り合っていくことですね。それは日本の場合についても、まったく同じです。

そことかここに限らず、むしろそれは、世界的な課題と言ってもいいのかも知れませんね。

エネビシ いろいろ貴重なアドバイス、ありがとうございました。

(T. えねびし)

参考文献・資料

〈文献〉

- 小貫雅男(1985)『遊牧社会の現代 ―モンゴルブルドの四季から―』青木書店。
小貫雅男(1993)『モンゴル現代史』山川出版社。
小貫雅男(2001)『菜園家族レボリューション』社会思想社。
小貫雅男・伊藤恵子(2004)『森と海を結ぶ菜園家族 ―21世紀の未来社会論―』人文書院。
小貫雅男・伊藤恵子(2006)『菜園家族物語 ―子どもに伝える未来への夢―』日本経済評論社。
小貫雅男・伊藤恵子(2008)『菜園家族21 ―分かち合いの世界へ―』コモンズ。
小貫雅男・伊藤恵子(2013)『静かなるレボリューション ―自然循環型共生社会への道―』御茶の水書房。
小貫雅男・伊藤恵子(2016)『菜園家族の思想 ―甦る小国主義日本―』かもがわ出版。
小貫雅男・伊藤恵子(2018)『菜園家族レボリューション ―日本国憲法、究極の具現化―』本の泉社。

〈映像作品〉

- 小貫雅男・伊藤恵子(1998)映像作品『四季・遊牧 ―ツェルゲルの人々―』三部作・全6巻、共同制作、大日。

プロフィール

小貫雅男(おぬき・まさお)

1935年中国東北(旧満州)、内モンゴル・鄭家屯生れ。
大阪外国語大学モンゴル語科卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程修了。
大阪外国語大学教授、滋賀県立大学教授を経て、現在、滋賀県立大学名誉教授、里山研究庵 Nomad 主宰。
専門は、モンゴル近現代史、遊牧地域論、地域未来学。
著書多数(参考文献・資料参照)。映像作品に『四季・遊牧 ―ツェルゲルの人々―』三部作・全6巻がある。

トルガー・エネビン(とるがー・えねびし)

モンゴル国フブスグル県生れ。
2002 - 2007年、モンゴル国立大学モンゴル語文化学部にてモンゴル・日本語文化専攻。
2005 - 2006年、日本留学、大阪外国語大学(旧)、日本語文化教育センターにて日本語文化研究。
2008 - 2010年、モンゴル国立大学言語学研究科、言語学修士取得。
2013.4. - 2014.3、日本留学。名古屋大学国際開発研究科国際協力コース、研究生。
2014.4.1 - 2016.3 大阪大学言語文化研究科言語社会専攻、博士前期課程修了。
2016.4～現在、大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程在学中。

職歴として、

2007. - 2010年、Gender Center for Sustainable Development, NGO, Citizen's participation program- "Green community", "Community Nutrition Center", "Citizen's participation in Community development", project coordinator. 2007. - 2013年、"Gender and Women study" program officer. 2010年から現在、Tolgoit Community Development Center, Board member "Gender and Women study" program officer。

修士論文：

「モンゴル人の自治の可能性と問題点一定住地の事例から考えるー」(2016年)。

Issues of Tradition and Change of Gender Identity-Interpretation Based on Qualitative Survey on Proverb and Identity of Mongolian Women and Men (2010年)。

著書として、『「歯を守ろう」市民の健康教育のためのパンフレット』(2009年) ウランバートル、共著に「モンゴルにおける障害者女性に関する課題」サーベイ、『ジェンダー研究第1号』(2010年) ウランバートル、がある。

参考付録文書 —《インタビュー》の総括にかえて

『静かなるレボリューションー自然循環型共生社会への道ー』(小貫雅男・伊藤恵子、御茶の水書房、2013年)の本編「21世紀の社会構想」の「はじめに」126～135頁からの抜粋。

新たな地平を開く 草の根地域未来学の研究

たしかに20世紀は戦争ではじまり、無惨な殺し合いに明け暮れた時代であった。しかし、それでも20世紀は、戦争と革命の世紀ともいわれているように、絶望一色に塗りつぶされていたわけではなかった。イギリス産業革命の進展にともなう人々の新たな苦悩の中から、19世紀、人類は人間解放の壮大な理念と目標を見出し、それを理論と思想にまで高めた。20世紀、人々が貧困の苦しみと戦争の惨禍に喘ぎながらも何とか生きていけたのは、19世紀後半、人類が到達したこの崇高な理念と目標があったからではないだろうか。

しかし、人類のこの崇高な夢への実験も、20世紀の末には挫折し、夢ははかなくも破れた。そして21世紀をむかえた今、私たちは、人類普遍の理念と目標不在の、海図なき時代を生きていかなければならなくなったのである。

人間が明日を失った時、それがどんなに惨めなことになるかは、私たちが生きている21世紀初頭の今日の時代を見るだけでも十分に頷けるはずだ。人々は、欲望のおもむくままに功利を貪り、競い、争い、果てには心を傷つけ合う。国家も「正義」の名において戦争を煽り、多くのいのちを奪う。その醜い争いや残酷極まりない自己の行為を隠蔽し正当化するために、個人のレベルでも、国家のレベルでも、虚偽と欺瞞が世の中に蔓延していく。そして、この倫理喪失のスパイラルはとどまることを知らず、人間を苦しめながら深い闇の中へと沈めていく。これほど大がかりに、しかも構造的に人間の尊厳が傷つけられ貶められた時代も、ほかになかったのではないだろうか。

今、幼い子供たちは、その小さな心を痛み、声にもならない悲痛な叫びをはりあげ必死にシグナルを発している。

今こそ19世紀未来社会論に代わる私たち自身の21世紀未来社会論を

序編でも見てきたように、19世紀、時代の偉大なる思想家・変革者たちにとって、歴史観の探究とその構築(人類史総括としての歴史学研究)は、経済学研究の導きの糸であった。その意味で、歴史観の構築と経済学の研究は、紛れもなく車の両輪となっていた。

こうした包括的で全^{ホリスティック}体的な研究の成果から自ずと導き出された19世紀の未来社会論(生産手段の社会的規模での共同所有に基礎をおく共同管理・運営によって、資本主義の根本矛盾を克服し、未来社会を展望する)は、19世紀から20世紀に生きる人々にとって、それがどんな結末をもたらしたかは別にしても、時代の行く手を照らし出す光明となって、確かにある時期までは夢と希望と生きる目標を与え、現実世界をも動かす原動力となっていたことは間違いのない歴史的事実であろう。しかし、20世紀末のソ連、東欧、モンゴルをはじめとする社会主義体制の崩壊によって、そして何よりも19世紀未来社会論が提示された時代から百数十年という長きにわたる世界と社会の急激な変化によって、資本主義超克としてのマルクス未来社会論の限界と理論的欠陥は露呈することになった。

20世紀も終わり21世紀初頭の今、私たちは、3・11の巨大地震と巨大津波、東京電力福島第一原子力発電所の重大事故という未曾有の大災害を境に、社会が大きく転換する時代の奔流のまっただ中に立たされている。精彩を失ったかつての19世紀未来社会論に代わる21世紀の私たち自身の新たな未来社会論を今なお探りあぐね、人々は、不確定な未来と現実の混沌と閉塞状況の中で、明日への希望を失っている。まさに今日、21世紀全時代を貫き展望するに足る未来像の欠如こそが、東日本大震災の被災地の復興のみならず、日本のすべての地域再生の混迷にさらなる拍車をかけ、そこに生きる人々を諦念と絶望にさえ陥らせようとしている。この地域の現実と労働の現場に気づかなければならない。私たちは、いつ止むとも知れぬ暴風雨の荒れ狂う大海を羅針盤なしで航海を続け、さ迷っているといってもいい。

手をこまねきそうこうしているうちに、現実はやがて容赦なく進行していく。市場原理至上主義「拡大経済」のもと、生命の源ともいべき自然は破壊され、人間生活の基盤となる家族と地域はいよいよ土台から揺らぎ、ついには崩壊の危機に晒されていく。生産力至上主義のもと科学技術と市場原理主義が手を結ぶ時、人間社会は止めどもなく暴走し、結局その行き着く先は人類破滅の恐るべき結末になるのだということを、何よりもフクシマは決してあってはならない自らの惨状をもって、私たちに警告したのではなかったのか。今こそ一刻も早く近代の「成長神話」の呪縛から解き放たれ、やがて来る未来のあるべき姿を確かなものにしなければならない。

19世紀未来社会論を克服し、21世紀の未来社会論としても同時に成立し得る「21世紀の社会構想」をいよいよ深めていかなければならない時に来ている。そして、何よりも今日の日本社会の行き詰まったこのどうしようもない現実から出発し、近代を根源的に超克し得る21世紀の新たな社会構想がこれほどまでに求められている時も、今を置いてほかにないのではないか。

新たな歴史観の探究を

こうした時代認識に立つ時、21世紀の新たな未来社会論の構築に先立って、今、何よりも切実に求められているものは、19世紀近代の歴史観に代わる新たな歴史観の探究であり、確立であろう。それはとりもなおさず、大自然界の摂理に背く核エネルギーの利用という事態にまで至らしめた少なくとも18世紀以来の近代主義的歴史観に終止符を打ち、21世紀の時代要請に応える新たな歴史観を探

究することであろう。そして、新たに構築されるこの歴史観と、そこから自ずと導き出される「地域研究」に裏打ちされた新たな「経済学」とを両輪に、21世紀の未来社会論は確立されていく。

大自然界の摂理に背く核エネルギーの利用に手を染め、恐るべき惨禍を体験するに至った私たちは、自然と人間、人間と人間の間をあらためて捉え直すよう迫られている。それにしても、大自然界と人間社会をあらためて統一的に捉え直すとするならば、宇宙、地球、そして生命をも包摂する大自然界の生成・進化を貫くきわめて自然^{ナチュラ}生的な「適応・調整」(=自己組織化)の原理(第十章に詳述)が、私たち人間社会にも、その普遍的原理として基本的には貫徹していることに気づかされるのである。

しかし、人類は大自然の一部でありながら、ある時点からは他の生物には見られない特異な進化を遂げ、ある歴史的段階から人間社会は、自然界の原理、すなわち「適応・調整」の普遍的原理とはまったく違った異質の原理、つまり「指揮・統制・支配」の原理によって動かされてきたことに気づかされる。人間社会の業の深さを思い知らされるのである。

今こそ広大無窮の宇宙の生成・進化の歴史の中で、あらためて自然と人間、人間と人間の間を捉え直し、私たち人間の社会的生存形態を根源から問い直す必要に迫られている。そして、市場原理至上主義「拡大経済」下の今ではすでに常識となっている現代賃金労働者^{サラリーマン}という人間の社会的生存形態とは、一体いかなるものであるのか、生命の淵源を辿り、人類史という長いスパンの中でもう一度、その性格と本質を見極め、その歴史的限界を明らかにしなければならない。現代賃金労働者^{サラリーマン}という人間の社会的生存形態を暗黙の前提とする近代の思想と人間観が、当初の理念とは別に、現実生活において結局は人々をことごとく拝金・拝物主義に追いやり、人間の尊厳を貶め、人間の生命を軽んじてきたとするならば、今こそそれを根本から超克しうる「生命本位史観」ともいうべき21世紀の新たな歴史観の探究に着手しなければならない時に来ている。それはまた、人間社会を壮大な宇宙の生成・進化の歴史の中に位置づけ、それを生物個体としてのヒトの体に似せてモジュール化して捉えるならば、「社会生物史観」(本編第十章の項目「自然界の普遍的原理と21世紀未来社会」に詳述)とも言うべきものなのかも知れない。

この新たな歴史観に基づく未来社会論の探究は、まさに諸学の革新の大前提となるべき学問的営為であるが、その研究状況は、時代が求める切実な要請からはあまりにも遅れていると言わざるをえない。しかし、この営為を抜きにしては、今日求められている本当の意味でのパラダイムの転換はありえないであろう。特に時代の大転換期においてはなおのこと、社会理論の再構築は、具体的現実から出発し、抽象へと向かうものでなければならない。専ら抽象のレベルから抽象へと渡りながら、抽象レベルでの概念操作 — 概念間の連関性や整合性のみの検証に終始し、それを延々と繰り返すだけでは、新たな時代に応えるパラダイムの転換も理論も生まれるはずがない。

今こそ21世紀の具体的現実世界に立ち返り、そこから再出発し、何よりもまず21世紀の新たな歴史観の探究と構築に努め、それを導きの糸に、新しい時代の要請に応える広い意味での「経済学研究」、そして「地域研究」にあらためて取り組まなければならない。こうした努力の延長線上に、わが国の現実^{カク}に立脚した、まさに21世紀私たち自身の草の根の未来社会論は再構築されていくにちがいない。

こうした問題意識のもとにここ十余年来提起してきたのが、この本編で述べていくことになる21世紀の草の根の未来社会論としての「菜園家族」構想、つまり市場原理に抗する「菜園家族」基調の免疫

的自律世界の構築であり、自然循環型共生社会への道なのである。

未来社会論に欠かせない「地域研究」の視点 — 新たな地域未来学の確立

ところで、私たちが生きている現代社会は、分かり易く単純化して言うならば、「家族」、「地域」、「国」、「グローバルな世界」といった具合に、多重・重層的な階層構造を成している。最上位の階層に君臨する巨大資本が、あらゆるモノやカネや情報の流れを統御支配する。そしてそれは、それ自身の論理によって、賃金労働者という根なし草同然の人間の社会的生存形態を再生産するとともに、同時に社会のその存立基盤そのものを根底から切り崩しつつ、この巨大システムの最下位の基礎階層に位置する「家族」や「地域」の固有の機能をことごとく攪乱し、衰退させていく。このことが今や逆に、この多重・重層的な階層システムの巨大な構造そのものを土台から朽ち果てさせ、揺るがしている。これが今日のわが国社会の、そして各国社会の例外なく直面している現実である。

人間社会の基礎代謝をミクロのレベルで直接的に担うまさにこの「家族」と「地域」の再生産を破壊する限り、人間社会のこの巨大な構造は、決して安定して存在し続けることはあり得ない。そうだとすれば、社会の大転換期にあってはなおのこと、経済成長率指標偏重のこれまでの典型的な「経済学」の狭い経済主義的分析では、こうした現代社会の本質をより深層からトータルに把握し、その上で未来社会を展望することは、ますます困難になっていくにちがいない。

私たちは今、このことに気づかなければならない。こうした時代の変革期に差しかかっているからこそなおのこと、現代社会のこの巨大な構造の最下位の基礎階層に位置する「家族」や「地域」から出発して、それを基軸に社会を^{ホリスティック}全一的に考察する「新しい地域研究」の必要性和重要性は、いよいよ大きくなってくると見なければならぬ。

では、そもそも「地域」とは、そして21世紀の今日の時代が求めている「新しい地域研究」とは一体何なのであろうか。今、あらためて考え直さなければならぬ時に来ている。

「地域」とは、自然と人間の基礎的物質代謝の場、暮らしの場、いのちの再生産の場としての、人間の絆によるひとつのまとまりある地理的、自然的基礎単位である。この基礎的「地域」は、「家族」によって構成され、多くは伝統的な少なくとも近世江戸以来のムラ集落の系譜を引き継ぐものである。人間社会は、「家族」、基礎的「地域」(＝ムラ集落)、さらには町、郡、県などいくつかの階梯を経てより広域へと次第に拡張しつつ、多重・重層的な地域階層構造を築きあげている。

人間とその社会への洞察は、とりとめもなく広大な現実世界の中から、任意に典型的なこの基礎的「地域」を抽出し、これを基軸地域モデルに設定し、多重・重層的な地域階層構造全体の中に絶えず位置づけながら、長期にわたり総合的に調査・研究することによってはじめて深まる。

現代は、世界のいかなる辺境にある「地域」も、いわゆる先進工業国の「地域」も、グローバル化の世界構造の中に組み込まれている。こうした時代にあって、自然と人間という二大要素からなる有機的運動体であり、歴史的存在でもあるこの基礎的「地域」を、ひとつのまとまりある総体として深く認識するためには、(1)「地域」^{シンクロニック}共時態、(2)歴史^{ダイアクロニック}通時態、(3)「世界」^{グローバルな}場という、異なる三つの次元の相を有機的に関連させて、具体的かつ総合的に考察することがもとめられる。こうすることによって、社会の構造全体を、そして世界をも、^{ホリスティック}全一的にその本質において具体的に捉えることが可能になってくる。やがてそれは、社会経済の普遍的にして強靱な理論に、さらには21世紀世界を見究める哲学にまで昇華されていく。地域未来学とも言うべきこの「新しい地域研究」は、こうして、21世紀の未来

社会をも展望しうる方法論の確立にむかうものでなければならない。

こうした主旨からすれば、本来、21世紀の「新しい地域研究」としての地域未来学は、諸学の寄せ集めの単なる混合物であるはずもない。だとすれば、それはまさに時代が要請する壮大な理念のもとに、自然、社会、人文科学のあらゆる学問領域の成果の上に、事物や人間や世界の根源的原理を究める諸科学の科学、つまり、21世紀の新たな哲学の確立と、それに基づく歴史観を導きの糸に、相対的に自律的な独自の学問的体系を築く努力がもとめられてくる。こうして確立される新しい地域未来学は、21世紀未来社会を見通し得る透徹した歴史観を新たな指針に、混迷する今日の現実世界に立ち向かっていくことになる。

グローバル経済が世界を席捲し、「家族」を、そして「地域」を破局へと追い込んでいる今こそ、グローバル市場化への対抗軸として、何よりもまず、私たちの生命活動を直接的かつ基礎的に保障している「家族」と「地域」の再生をはかり、本来の人間のあるべき生活圏の構築を急がなければならない。そのために今、何をなすべきかが問われている。新たなパラダイムのもと、包括的で新しい地域未来学の確立と、「地域実践」の取り組みがもとめられている所以である。それは、時代のこの大きな転換期にふさわしい新たな「経済学」を包摂した新しい「地域研究」の確立であり、21世紀を見通し、あるべき社会の未来の姿を提示し、しかもそのあるべき姿にアプローチするより具体的な道筋を明確に示すことなのではないのか。

この探究の道のりは、たやすいものではないが、自然、社会、人文科学の諸分野の垣根を越えた真摯な対話によって、道は次第に拓かれていくにちがいない。このことは同時に、これまでの十余年にわたる「菜園家族」構想の研究をあらためて顧みて、今、私たちが直面している3・11後というこの時代に答えようとするものでもある。

(了)